



国際理解教育の打ち合わせをする先生たち。今年度は、よりじっくり学ぶため、2カ月で1カ国を取り上げている

行っている。その内容は、職員が映像資料などを使ってテーマとする国について紹介し、その後、園児らが文化を体験したり、民族衣装の創作を行ったりするといったもの。また、給食の時間に現地の料理を食べるなど、まさに五感を使って学んでいる。

昨年度は、月ごとに1カ国を取り上げ、台湾やベトナム、モンゴル、インドネシアなどについて学んだ。ベトナムの回では、現地語の挨拶をみんなで練習した他、ベトナム伝統の三角形の麦わら帽子「ノンラー」を画用紙で製作。子どもたちは自分で作ったノンラーをかぶったの記念撮影を楽しんだ。こうしたにぎやかな活動に加え、映像資料では日本のボランティア団体がベトナムで行っている教育改善プロジェクトの動画を紹介した。ベトナムでは学校に行けることが当たり前で



吉村さんと一緒に国の場所当てゲームを楽しむ子どもたち。世界を知ると同時に、日本についても学べるよう、国際理解教育では「日本」もテーマとして扱う

世界とつながる教室

はないということを知ると、子どもたちは真剣な表情で画面を見つめていた。「自分自身、海外経験がなかったため、最初は子どもたちに何を伝えていいのかわかりませんでした。手探りで国の情報を調べていましたが、活動を続けているうちに親御さんたちから「子どもが家で外国の話をする」といった声が聞かれるようになったんです。開園当初からおへそ保育園で働く諸岡琴美さんは、活動の成果をうれしそうに語る。

そんな諸岡さんは、同園のグローバル教育コンクール2015の受賞を受けて、この10月にJICAを通じてセネガル視察に参加する予定だ。「未知の国でしたので、迷いもありました。でも、参加を決めた今は楽しみです。子どもたちによりたくさんのお話を聞えらるようになりたいです」

手段としての国際理解教育 考え、認め合い、楽しむ心を

月々の取り組みでまわっている国際理解の種は、すでに芽を出し始めている。「僕はインドネシアとメキシコとベトナムを知ってる」「私は日本語だけじゃなくて、英語も知ってる」。おへそ保育園の子どもたちは幼くして、自分が日本という国に住んでいること、そして、日本の他にもたくさんのお国があるということを理解しているようだ。

こうした背景には、国際理解教育を、楽しい、だけで終わらせるのではなく、見たこと、聞いたこと、感じたことを子どもたちが自らの言葉で発信するプレゼン



モンゴルの国旗を描いたレポートを作成した園児



レポートを発表する姿は堂々としたものだ



ネパール地震の後、園児らの提案で地元ネパールの方々に国旗の絵や手紙を送った。子どもたちからのエールを受け、涙を流すネパールの人々

違いを認め合う心を育てる

JICAが毎年実施している「グローバル教育コンクール」。世界が抱えるさまざまな課題を自らの問題として考え、解決のために行動できる人を育てる活動を後押しするものだ。昨年、その取り組みで最優秀賞を受賞したのは、佐賀県のおへそ保育園。そこには、園児たちが世界について思い思いの言葉で語り合う姿があった。

ティーンズの時間を設けていることがある。園児らは毎回、新しく知った国の国旗や文化を「レポート」として画用紙に絵などでまとめ、一人一人発表するのだ。さらに、子どもたちの考える力・発信する力を育てているのが、国際理解教育と並んで、おへそ保育園が注力している「こども哲学」だ。週に2回のこども哲学の時間、4歳以上の園児たちは円になって座り、あるテーマについて話し合ったり、やさしいって何だろう……。その問い掛けに、園児たちは、「赤ちゃんによしよしてあげる」と、「世界中の人と仲良くすること」と、それぞれの考えを話した。自分の考えを確かめるようにゆっくりと言葉にしていく子、迷いなく周囲に語り掛ける子。一人一人の個性の中に自我が育っていく瞬間だった。

そんな子どもたちについて、吉村さんは、「私たちが耳を傾ければ、幼い子どもでも徐々に自分の考えを言葉にできるようになるものです」と笑顔で語る。

吉村さんにとって、国際理解教育やこども哲学は、それ自体が目的ではない。「島国の日本は、独自の素晴らしい文化や日本らしい教育の良さを持つ一方で、違い、をネガティブに捉える傾向が強いように思います。世界の国々を紹介することを通じて、違いを楽しみ、個性や多様な価値観を認め合う心を育みたいと思っております」

吉村さんがこうした志を持つようになった背景には、恩師の教えがあるという。「故古賀武夫先生の元で5歳から空手と英語を習っていました。先生が何より強く伝えていたのは、他を認めることの大切



卒園式で国際理解教育の発表として、映画「世界の果ての通学路」の劇を演じる子どもたち

子どもは大人が思うより たくさんのお国を考えている

保育園で国際理解教育を行うと聞いて、どう思うだろうか。幼児には難しすぎる？ 早すぎる？

「それは、大人の姿勢次第です。私たちは特別なことを教えているわけではありませぬ。世界にはいろいろな国があり、それぞれ違うから楽しいのだということをお伝えしているのです。そう話すのは、佐賀県佐賀市にある「七賢人の里おへそ保育園」の吉村直記園長だ。

幼児教育を通じて、人づくりの根幹に携わること志していた吉村さんは、大学卒業後、保育サービスのコンサルティング企業で1年半保育園の運営について学び、2011年4月に株式会社ミズが経営するおへそ保育園の園長に25歳で就任した。

おへそ保育園では設立当初から、4歳以上の園児たちを対象に国際理解教育を

切さ、です。先生は、国際協力や国際交流の活動を行う、認定NPO法人地球市民の会」の創設者でもあります」

高校時代に1年間、メキシコに留学した吉村さん。慣れない生活に不便を感じることもあったが、違いを受け入れ、楽しむことを実践として学んだ。さらに、現地で築いた友情は、人と人との絆が国を結ぶことを教えてくれた。

「子どもたちは、国と国の違いを知りながら、自然と認め合うことを学んでいます。国際理解教育は、人として大切なことを学ぶ手段の一つでもあるのです」。そんな吉村さんの言葉を遮らんばかりに、世界の国々について元気に話す園児たちの声が響いていた。